

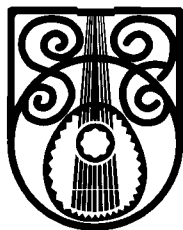
オーケストラ シンフォニカ 東京

第 59 回

定期演奏会

2018 年 4 月 8 日 (日) 午後 2:00 開演

第一生命ホール



O S T の歴史

- 1915(大正 4)年 9月 : 武井守成*¹楽団創設
- 1916(大正 5)年 4月 : 楽団名をシンフォニア・マンドリニ・オルケストラと称する
- 1923(大正 12)年 11月 : 楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・タケキに改称
- 1949(昭和 24)年 11月 : 戦後初めての定期演奏会開催(第 49 回)
- 1949(昭和 24)年 12月 : 武井守成 逝去
- 1953(昭和 28)年 5月 : オルケストラ・シンフォニカ・タケキ 第 55 回演奏会開催
- 1954(昭和 29)年 : 杉並マンドリンアンサンブル創立
- 1955(昭和 30)年 10月 : 杉並マンドリンアンサンブル 第 1 回演奏会(通算 56 回)
- 1956(昭和 31)年 7月 : オルケストラ・シンフォニカ・タケイに改称 第 57 回演奏会開催
- 1958(昭和 33)年 12月 : オルケストラ・シンフォニカ・タケイ 解散
- 1959(昭和 34)年 12月 : 杉田村雄*²オルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興
本楽団第 1 回定期演奏会開催
- 1986(昭和 61)年 7月 : 杉田村雄 逝去
- 1987(昭和 62)年 5月 : 楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・東京に改称
- 2016(平成 28)年 11月 : 10月 11 日(武井守成の誕生日)がマンドリンの日と設定される
- 2018(平成 30)年 4月 : 第 59 回定期演奏会開催

* 1) 武井守成 (たけい もりしげ : 1890年10月11日~1949年12月14日)

枢密顧問官武井守正の二男として鳥取に生まれる。宮内省楽部長・式部官長、男爵。
マンドリン合奏団『オルケストラ・シンフォニカ・タケキ』(O S T)を主宰し、マンドリン合奏曲・ギター独奏曲の作曲家として活動。また雑誌『マンドリンギター研究』を発刊し、1923年にマンドリン合奏コンクール、1924年に作曲コンクール、1927年にはマンドリンオーケストラ作曲コンクールを開催してマンドリン・ギター音楽の発展に尽力した。

* 2) 杉田村雄 (すぎた むらお : 1903年2月14日~1986年7月17日)

八王子・南多摩郡多摩村の村医杉田武雄の長男として生まれる。
暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2人で暁星マンドリン倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。
1939年O S Tに入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係楽譜・資料も戦火を免れる。
武井氏逝去後、O S Tの再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

◆ ◆ ◆ プログラム ◆ ◆ ◆

第 一 部 指揮： 嶋 直 樹

1. 「2つの抒情曲」より第2曲「ゆりかご」 E. H. グリーク (嶋 直樹編)
2. 前奏曲 E. A. ヤルネフェルト (嶋 直樹編)
3. 「弦楽セレナーデ」より第2楽章「ワルツ」 P. I. チャイコフスキー (嶋 直樹編)
4. オペレッタ「軽騎兵」より「序曲」 F. V. スッペ (Z. Pratesi編～嶋 直樹改)

第 二 部 指揮： 石 井 啓 之

1. 軒訪るる秋雨 (ギターソロ) 武井守成
ソロ 小林 透
2. 豊年 武井守成
3. 秋桜 (コスモス) さだまさし (石井啓之編)
4. 秋の唱歌メドレー 石井啓之編
5. 古戦場の秋 小池正夫

《 休 憩 20分 》

第 三 部 指揮： 山 本 雅 三

1. ハンガリアの黄昏 (狂想曲) D. ベルッティ
ソロ 田中尊子
2. 優美なセレナータ A. アマデイ
3. 英雄葬送曲 C. O. ラッタ

曲 目 解 説

第一 部

「2つの抒情曲」より第2曲「ゆりかご」

E. H. グリーグ

エドヴァルド・ハーゲルupp・グリーグ（1843年～1907年）はノルウェーの作曲家。ノルウェーの民族音楽から影響を受けた曲を多く作りました。この曲は元々ピアノ独奏曲のための「抒情小曲集」という全10集からなる曲集の第9集の中の曲ですが、作曲者自身により2曲を管弦楽用に編曲したものの一つです。グリーグは一人娘を1歳で失い、その子への追想の曲となっています。

前奏曲

E. A. ヤルネフェルト

エドヴァルド・アルマス・ヤルネフェルト（1869年～1958年）はフィンランド出身の指揮者・作曲家。妹アイノは作曲家シベリウスの夫人となりました。1909年にスウェーデンに帰化し、ストックホルムを中心に活躍しました。この「前奏曲」は1900年に作曲された管弦楽曲で特徴あるフレーズが様々なパートにより掛け合いのように演奏されます。中間部に美しいソロもあり、あまり知られていない曲ですが楽しめる小品です。

「弦楽セレナーデ」より第2楽章「ワルツ」

P. I. チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840年～1893年）が作曲した「弦楽セレナーデ」。私たちOSTでは8年前に第1楽章を演奏しています。今回は第2楽章「ワルツ」を取り上げました。1880年、チャイコフスキー40歳の年に作曲され、翌年初演された際には好評でワルツがアンコールされたとのこと。

チャイコフスキーは交響曲の楽章の中にもワルツを取り入れています。これはモーツァルトなど古い時代の様式にメヌエットなどの舞曲が入っていたことを意識していたことを表しています。弦楽のための「組曲」ではなく「セレナーデ」としたこともそれを裏付ける証拠と言えるようです。

オペレッタ「軽騎兵」より「序曲」

F. V. スッペ

フランツ・フォン・スッペ（1819年～1895年）はオーストリアの作曲家であり、オペレッタとその序曲が有名で、「ウインナ・オペレッタの父」とよばれることもあります。オペレッタはいわゆる喜歌劇で軽妙な筋書きと歌をもつ娯楽的な作品が多く、主にドイツ・フランスで確立されました。オッフェンバックの「天国と地獄」やヨハン・シュトラウスⅡの「こうもり」などがよく知られています。スッペの「軽騎兵」は現在では原曲のスコアがなくストーリーも不明だそうで、この「序曲」のみが知られています。

（文責 嶋）

第二部

第57回は「春」、第58回は「夏」、そして今回の第二部は「秋」をテーマとしました。

軒訪るる秋雨

武井守成

武井守成（1890年～1949年）が1924年にギター独奏曲として作曲しました。翌1925年にマンドリンオーケストラ用に編曲されています。「オルケストラ シンフォニカ 東京」に改組されてからは初めての演奏となります。今回は、オリジナルのギター独奏でお贈りします。

武井の盟友の菅原明朗は『この曲はさびた味はないかもしれない。しかしナイーブな、それでいてなかなかかしゃれたその味わいは氏でなければちょっと表現できないものである。（中略）私のもっとも好きなものであり、また氏の作中のすぐれたものとして推すに躊躇しないものである。』（マンドリンとギター誌第十年第六月号）と賞賛しています。

豊年

武井守成

1930年に作曲され、1931年に改定され完成されました。和風な旋律とリズムによる巧みな表現により、秋の豊かな収穫を祝って歌い踊る農民と農村の風物が生き生きと描写されています。ジャワの竹製のアングルンと呼ばれる楽器によるカラカラという鳥追いの音や、米俵を積んだ馬のシャンシャンという鈴の音などが豊年の喜びを増幅します（第40回OST演奏会解説を翻案）。

秋桜（コスモス）

さだまさし（石井啓之編）

さだまさし（1952年～）作詞・作曲で、1977年10月に山口百恵の19枚目のシングルレコードとしてリリースされました。「日本の歌百選」にも選ばれています。それまでの山口百恵のどちらかと言うとつっぱり系のイメージを大きく変えて、日本女性らしい面が現れた作品となりました。OSTとしては今年の「ひと夏の経験」に続く百恵シリーズ第2弾となりました。

秋の唱歌メドレー

石井啓之編

今年の夏のメドレーに引き続き、秋の唱歌をメドレーにしました。文部省唱歌「村祭り」（1912年）、高野辰之作詞、岡野貞一作曲の「もみじ」（1911年）、斎藤信夫作詞、海沼實作曲の「里の秋」（1948年）、サトウハチロー作詞、中田喜直作曲の「ちいさい秋みつけた」（1955年）、三木露風作詞、山田耕筰作曲の「赤とんぼ」（1921年）の5曲のメドレーでお届けします。「赤とんぼ」は4番まで指揮者の合図で演奏に合わせて歌っていただければ幸いです。次頁に歌詞を載せました。

(間奏)

一 夕焼、小焼の、あかとんぼ
負われて見たのは、いつの日か

三 十五で、^{ねえ}姐やは、嫁にゆき
お里の、たよりも、たえはてた

二 山の畑の、桑の実を
^{こかこ}小籠に、つんだは、まぼろしか

四 夕やけ、小やけの、赤とんぼ
とまっているよ、竿の先

古戦場の秋

小池正夫

小池正夫（1903年～1965年）が1938年に作曲しました。曲は荒涼とした秋の古戦場にたたずみ、戦いの往時を偲ぶところから始まります。やがて戦場の様子が幻影のごとく現れます。兵たちの不安と心の高ぶりが描かれ、足音高く戦場への行進が開始されます。大将同士の名乗り、そして戦いの火蓋が切って落とされます。激しい刃音、兵どもの駆け巡る音、そして戦いは終わります。あれから何年たったのでしょうか。往時の面影もなくただ野をさわやかな風が吹いていくばかりです。小池正夫の代表作であり、日本人作曲者によるマンドリン曲が少なかった頃に、日本全国のマンドリン楽団で盛んに演奏された曲でした。

(文責 石井)

第三部

ハンガリアの黄昏（狂想曲）

D. ベルッティ

ハンガリアといえばロマ（ジプシー）音楽のチャルダッシュが有名ですが、本曲も同様のエキゾチックな雰囲気満ちています。始まりはラッシュュー（Lassu）と呼ばれる遅く情熱的な部分から。快速で躍動的なフリスカ（Friska）を経て、ソロが合奏を伴いラッシュューを情感豊かに奏でつつ即興的で自在なカデンツァへ。さらに協奏曲風にフリスカ→ラッシュュー→フリスカと移り変わり重厚なレントで終えます。遅いと速い、ソロと合奏、この極端な対比がこの曲の真骨頂となっています（1936年イル・プレットロ主催の第7回作曲コンクールに入賞）。

作者のディーノ・ベルッティ（1893年～1947年）はイタリア北部出身。20世紀初頭のマンドリン音楽の黄金時代の後の停滞期に新風を吹き込みました。正規な音楽教育を受けていないにもかかわらず、繊細で美しい旋律と自在なテンポ感に天性の才能を感じます。とても神経質な人柄といわれ、戦後、発作の治療のための手術を受けることとなっていました。極度の絶望感から自ら命を絶ってしまったということです。

優美なセレナータ

A. アマデイ

波のように寄せてくるリズムが心地よい、ワルツ風の可愛らしい小品です。1922年に出版。作者のアメデイオ・アマデイ（1866年～1935年）は「海の組曲」「降誕祭の夜」「プレクトラム賛歌」などの作品でマンドリン界を代表する作曲家の一人です。イタリアらしい明るくロマンチックな作風は誰でも親しみやすく、高い人気を獲得しています。

英雄葬送曲

C. O. ラッタ

カルロ・オテロ・ラッタの作曲。戦死した勇者を悼む深い悲しみの激情の前半、きわめて美しく安らかな後半、誇り高く堂々とした終曲という見事に対照的な構成となっています。素晴らしい楽曲でありながら、戦争の宣伝に利用されたという経緯があったがために、戦後は埋没したまま時間が流れたようですが、現在ではその素晴らしい音楽性ゆえに頻繁に演奏されるようになりました。中野二郎先生が本曲を1999年に出版した際の解説を以下にご紹介します。

「第二次世界大戦の最中、イタリアのシエナで1940年、41年に亘りマンドリンオーケストラのためのオリジナル作品作曲コンクールが行われた。当時は1922年以来独裁政治を続けてきたファシストの最強となった頃で、主催もファシストの一国家機関O・N・Dの名のもとに行われた。二回とも大きな成果を挙げて多くの優れた作品が入選したが、枢軸側の敗戦によってイタリアの音楽界も大打撃を受けて復興するに至らず、あたら名曲も出版されることなく眠ったままになっていた。

1974年春渡伊した、同志社大学OB指揮者岡村君はこれ等の名曲を保持するシエナのアルベルト・ボッチ氏と親しくなり懇願してこれ等のコピーを譲り受けることが出来た。

本曲「英雄葬送曲」も第二回コンクール（1941年度）に二等受賞した作品である。この作者は第一回コンクールにも「東洋舞曲 チュニジアのイタリア人」（In Tunisia Italiana, Danza Orientale）が二等に入賞している。

本曲は第二次世界大戦中、枢軸側の重要な根拠地であったリビアのトブルク陥落に寄せた迫力ある悲壮な挽歌である。トブルクは第二次世界大戦の枢軸側（独伊）と連合軍（英米仏）との間に再三激しい攻防の繰り返された所で、両陣営の勝敗を決する山場であったので、トブルクの陥落によって戦況の大勢は連合軍側に傾いていった。作者はイタリアフェルラーラの作曲家で1888年9月24日生、1945年10月30日没。（解説／中野二郎）

（文責 山本）

出 演 者

指 揮 者：山 本 雅 三 嶋 直 樹 石 井 啓 之

コンサートマスター：田 中 尊 子 小松崎美奈子

第一マンドリン：田 中 尊 子 田 島 明 子 金 勝 溪 子 本 間 輝 樹
 小松崎美奈子 大 口 千 秋 神 敏 子 新 美 恵 子
 内 野 典 子

第二マンドリン：富 田 容 子 木 村 栄 子 中 村 順 子 岩 崎 宏 子
 高 嶋 明 美 後 藤 俊 明 渡 辺 か お る 宮 澤 八 重 美
 鈴 木 園 子 宇 野 弥 生 *宮 崎 俊 行

マンドラテノール：新 谷 文 子 滝 田 ふ さ 子 渡 辺 清 荏 本 妙 子
 阿 形 佳 美 田 中 倭 文 子 伊 藤 安 子 関 谷 裕 子

ギ タ ー：小 林 透 平 田 陽 一 門 田 雄 二 原 島 美 歩
 高 嶋 典 子 戸 次 脩 船 崎 薫 澤 田 行 雄
 五 十 嵐 豊 山 崎 豊

リユートモデルノ：嶋 直 樹 石 井 啓 之 山 本 雅 三

マンドロンチェロ：田 村 美 恵 子 澤 田 理 恵

マンドローネ：小 川 眞 寿 美 吉 尾 浩

コントラバス：佐 藤 正 石 黒 不 二 夫 *樺 澤 と も 子

フル ー ト：*松 尾 圭 子

クラリネット：*福 嶋 美 香

ピ ア ノ：*浦 島 晶 子

打 楽 器：*飯 野 晶 子 *田 中 恵 利 加

(★=賛助奏者)

《第60回定期演奏会のお知らせ》

◎日時：2019年4月14日(日)午後 2:00 開演 ◎会場：第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

連絡先：石 井 啓 之
 E-MAIL：hi@ishii164.net
 ホームページ：http://ostokyo.info/